3　バクーニンと函館・横浜・神奈川

若山健二

1

およそ百年間の日本と外国のアナキストの交渉史のいわば番外史のなかで、特に私の注目することが二つある。一つは明石元治郎がクロポトキンに活動資金を提供しようとして拒否されたのではないか、ということである。明石については古くから彼を英雄あつかいする伝記がいくつか書かれており、最近になっても同似の趣旨のセミフィクションが南条範夫、杉森久英によって執筆されているが、この件については直接的に触れるところはない。明石に多くのページをさいたフットレルの著書にもない。明石側の文献とクロポトキン側の文献（特にボールドウィン）を重ね合わせると上に記したような疑問が出てくる。かりに明石がクロポトキンに活動資金の提供を申し出たことがあったとしても、クロポトキンがそれを受諾することは考えられないのだが、今のところ、隔靴掻痒という感じなので、疑問をそのまま保留しておく。

その二がバクーニンの来日である。この事実そのものについてはすでに周知のことであるが、滞在日数が少なかったこともあって、あまり多くの特記すべき事項もないようである。それでも先達の考証によっていくらかの事実が明らかにされている。重要なものの初出の論文名と刊行年を古いものからあげると次のようになる。

1　新村出「バクーニン来航の事など」（大正十三年）
2　板橋倫行「『横浜ホテル』逸事」（昭和一八年）
3　板橋倫行「〈横浜ホテル〉のころ」（昭和二九年）
4　木村　毅「バクーニンと日本」（昭和四四年）
5　逸見吉三「日本へ来たバクーニン」（昭和四六年）

主にシベリア脱出の経過と函館における動静をあつかったものとしては次の二つがあり、いずれもほとんど外国側の資料に依拠している。

6　久保　譲「バクーニンのシベリア脱出」（昭和三一年）
7　金子幸彦「バクーニンのシベリヤ脱出」（昭和四九年）

私のこの小論では前出の七論文と重複する引用はほとんど避けたから、1の改訂版を収録する『新村出全集』（筑摩書房）、4を収録する木村毅『五人の革命家』（講談社）、7を収録する『バクーニン著作集』第四巻（白水社）は現在刊行中であるので、一読しておいてほしい。

2

Bがシベリアを脱出して函館へ到着するまでの経過についてはカー、ピールモヴァのB伝および5、6、7に記されているが、より詳しくはカー「Bのシベリア脱出」がある。Bが来遊した当時の函館は箱館であるが、ここでBはロシア領事と会う。この領事は7によるとゴンケヴィチとされる。彼の赴任は『函館市誌』と『函館区史』で一ヶ月ずれているが、B来館当時のロシア領事であったことは、『夷匪入港録』などから推定される。彼は日本最初の日露辞典『和魯通言比考』（語順はイロハ）の編者であり、日本といろいろのことで（たとえば対馬事件）なじみ深いから彼の関係文献をあさると何か記述があるかもしれない。この函館におけるエピソードをゲルツェン「Bとポーランド問題」が伝えているので、5、6、7を補っておく。

Bの逃亡は空間的に注目すべきものであって、地理的な意味で最長の逃亡である。商用の口実でアムール川へやってきて、彼を日本の岸辺へ連れて行ってくれるように、あるアメリカの船長を説得した。函館（？）で別のアメリカの船長が彼をサンフランシスコまで運ぶことを引きうけた。Bは船でその船へ行き、しきりと正餐のために働いている船乗りに出会った。彼はある高貴な客を予想して、Bを招待した。Bは招待を受けて、客が到着したときになってやっとこれがロシヤ領事であると知った。

かくれるには遅く、危険で、おかしかった。彼は客と会話をすぐに始めて、物見遊山することは許されていると語った。私の記憶では、ポポフ大将のロシヤの小艦隊が海にいてニコラエフへ航行する支度をしていた。

「あなたは私たちと帰らないのですか？」

と領事は尋ねた。

「私はたった今到着したばかりです。もう少しこの辺を見たいのです。」とBが答えた。

いっしょに食事をして、彼らは親しい友人として別れた。翌日、彼はアメリカ船でロシヤの艦隊のかたわらを航行した。大洋以外にもう危険はなかった。

次にBが登場するのは横浜で、横浜ホテルへ投宿したことは2、3、5に記されており、このホテルがフーフナーゲル・ホテルとも呼ばれていたこと、おおざっぱな様子もそれらに記されている。わが国のホテルは、シーボルト『江戸参府紀行』に出てくる長崎屋（江戸）が元祖であるとされているが、ホテルという名称を最初に用いたのが横浜ホテルであるようであって、横浜ホテルは外国人関係の文献にときどき出てくる。たとえば、呉秀三のシーボルト伝には横浜ホテルとして、シュービースの旅行記にはフーフナーゲル・ホテルとして登場するが、オイレンブルク『日本遠征記』から以下を引用して、2、3、4を補う。

われわれは、横浜の友人たちが当時でき上ったばかりの横浜ホテルにいるのを見出した。このホテルは、亡くなったオランダ人の船長の建てたもので、あまり設備がよいとはいえないが、彼らは満足して滞在していた。この旅館の建物の前部は、すでに着工され、この冬中には完成するところだった。かなり広い中庭を囲んで、三方に、一階建てのバラックの建物があるのだが、これらはみな木造である。片側には、食堂とそれに付随して撞球場と酒場があり、向い側に居間と寝室が連なっている。その背後に、中央の建物に面して立っているのが厩舎である。すべてが急拵えの板張りで、半ば日本風、半ばヨーロッパ風な設備である。当時は、全体が即製の年の市の酒場のようであったが、台所と穴蔵はよく、宿の主人も信用のおける感じのよい男であった。給仕は一人一人自分でやった。

この横浜ホテルは、玉突台があることを除けば、すぐそばのジャーディン・マセソンの洋館とちがって、さほど目立つ建物ではなく、おそらく看板も出されていなかったであろうし、邦人の間ではホテルという名詞さえも知られていなかったであろうことは、『珍事五ヶ国横浜はなし』『清水建設百五十年』から推定される。

このホテルは日本人街のなかに建てられたものではなく、実のところは外人居留地の七〇番館の別称であって、横浜ホテル、フーフナーゲル・ホテルという名称は外国人の間でのみ使われていたものであろう。前出の『横浜はなし』（文久二年）によると

七拾番　蘭　カブタイメン
異人旅籠屋
娘　きん　小使　新七

『横浜奇談』（文久三年）によると

七十番　蘭　ハタゴヤ
カブタイメン

とあり、七〇番館の異人旅籠屋こそが横浜ホテルであっ

たと断定できるのだが、その有力の資料は玉突台である。石井研堂翁でさえもその名前を知らなかった横浜ホテルの玉突台の図は3にあり、これは『横浜開港見聞記』(文久二年)から採ったものと思われるが、『横浜はなし』『横浜奇談』の両書で、近辺の描写とあわせ、異人旅籠屋の玉突台(シューピースによると、当時はたった一台)について興味深く記されており、地理的にも七〇番館が横浜ホテルと直結されるのである。玉突台はその後居留地に増加したらしく、「ジャパン・パンチ」(一八六六年のある号)には二台描かれており、福田栄太郎たちが腕をきそったのはこの台であろう。なお、同誌にはボーリングの図さえもあり、明治二三、四年頃の浅草起源説をはるかにさかのぼることができる。

横浜ホテルの建設は安政六年と推定される。『横浜沿革誌』の安政六年のころで、外人居留地の説明のなかに「本町通に寺院の如き平家一ヶ所堅瓦海鼠壁の平家ホテル一ヶ所建築成れり」(原文カタカナ)とあり、このホテルを2は横浜ホテルに問擬するが、前出のオイレンブルクの記述は安政六年の翌年つまり万延元年のことであるから、完成は万延元年であるにせよ、安政六年にはすでに使用可能な程度に建築されていたようである。従って、安政六年の建設とすべきであろう。なお、ホテルという言葉が説明なしに使用されているが、これは『横浜沿革誌』が明治二五年の刊行だからであって、前述のことと矛盾するものではない。なお、異人が外国人のことを指すのは当時の文献から判明するが、ハタゴヤのなかにホテルを含める、つまりホテルという言葉がその頃の日本にはなかったことは、B来日の一年前に渡米した感臨丸の一行について訳した尾佐竹猛『幕末外交物語』のなかに、「ホテルという言葉が抑々初耳で第一に珍らしかった。ホテルを説明して、ホテルとは旅籠屋の事なり、と」とあることからして、判明するのであって、かくして、「異人旅籠屋」は現代風に表記すると「外国人ホテル」ということになるのである。

横浜ホテルの始在地を裏付ける材料を提示しておく。こまかなことになるが、「娘きん」がいわゆる「らしゃめん」であったことは別の資料から判定できるし、カブタイメンというのはホテルの主人か管理人であろう。フーフナーゲルはすでに死去しているから七〇番館には出てこないのだが、『横浜奇談』には百七番にホフナカルとある。(「ハウス」が「ホイス」とされた時代だから、この程度の表記のズレは無視してさしつかえあるまい。)ところが『横浜はなし』の百七番にはナジセウとあり、明治以前の建築史研究に欠かすことのできない橋本

玉蘭斎「横浜外国人住宅細見」(文久元年頃)によると、横浜ホテルのあったところにナツショウ(ナツセウのことであわう)の住家がある。ナツセウ、フーフナーゲル、カブタイメンはいずれもオランダ人であり、何らかのつながりはあると推定されるが、カブタイメンは人名ではなく普通名詞(たとえば「船長」に相当する英語もしくはオランダ語)と考えられないこともないし、藤本実也『開港と生糸貿易』の幕末渡来の欧米人のリストにあげられているJ・C・フーフナーゲルと同一人物と思われるフーフナーゲルは一八六〇年二月六日の夜に、日本人によって暗殺された来浜したばかりのオランダ人の船長となんらかのつながりはなかったであろうか。この暗殺についてはローマ字でおなじみのヘボンやブラウンの手紙にみえるが、万延元年二月二七日付のヘボンの手紙では、「横浜のホテルを出て散歩に」でかけて一五分ほどで本町通りで殺されたという。原文を見ることはできなかったが、同年四月某日の手紙では神奈川には「旅館や旅籠屋」があるとあるが、二月二七日の手紙にある「横浜のホテル」こそ、おそらく横浜ホテルであろう。さらにナツセウは、復刻された一八六三年月日不詳の『日本貿易新聞』では船名とある。

頭を悩ませるのはこの新聞の広告である。広告には次のようにある。「エレグロサクシュホテル旅籠屋、是は本通横浜ホテルの隣家たり、日本新聞紙を出版する家に近き処なり」。2によると「本町通(本通)」とあり、同一であることがわかるのであるが、3が日本のホテルの第二号と推定するエレグロサクシュホテルについては皆目見当がつかない。横浜ホテルの隣家といえば七一番館だが、当時の居留地内にはそれらしきものはない。「日本新聞紙」とあるが、これはいわゆる「会訳社筆写新聞」のことであろう。日本の新聞の鼻祖とされる浜田彦蔵はBとは無縁ではないが、浜田以前の新聞は一連の邦訳新聞であって、その出版所の近くに横浜ホテルはあったようである。とするなら、会訳社が横浜にあったとすれば、柳河春三などの目にとまっていたと思うのだが、尾佐竹猛『柳河春三』にはそうしたことはふれていないし、会訳社の所在地も明記されていない。別のルート、たとえば会訳社同人の著述から調査をしたほうが早いように思われる。

横浜ホテルの所在地については、先に私は居留地の七〇番館と推定したが、これをもとにすると現在地も容易に判明する。安政六年から現代にいたるまでの外人居留地、とりわけ七〇番館附近のものを比較対照すると、ほとんど(というよりも全くと言ってしかるべきであろう)

変っていないのであって、横浜ホテルは、現在の中区山下町七〇番地に建てられていたのである。惜しいことに、建築後わずか数年にして、おそくても一八六六年一一月二六日のいわゆる「豚屋火事」によって灰燼に帰したであろうことは、八七〇番は破破されたVと実見したブラックの『ヤング・ジャパン』から推定される。一〇年たらずの生命ではあったが、多くの歴史的事件の裏舞台となっていたにもかかわらず、板橋氏によって堀り起こされるまで埋もれていたのである。つい何気なく読みとばしがちな事物、たとえばオルコック『大君の都』にも、横浜ホテルという名前こそ出てこないが、きちんと顔を出しているのである。

ここで以上の記述をもとに大きな仮説をたてておく。かなり整備された居留地を描き、ジャーデン・マセソンも見事に写している玉蘭斎『細見』の「ナツショウ住家」こそ、隣人（ガルベル、つまりバルベル）からして、本町通りに面した運上所近くの角という位置からして、横浜ホテルであるように思う。オイレンブルク、シュピースその他の資料とこの図とはいくらか食いちがいがないわけではないが、私の推論から帰結される横浜ホテルの所在地、従って建物はそれ以外に考えられない。（私の推論はビルトダウン人をほうふつさせないわけではないが、一応の確信を私はもっている。）

5によると、横浜ホテルの投宿者記録があり、これには「ロシア亡命偉丈夫宿泊す」とあり、その前後にハイネの名前があるという。私はこの資料を見ることができなかったが、5に3その他を重ね合わせ考証するとき、右の一文だけが孤立してしまうし、「ロシア」「宿泊す」という表現からして文久元年のころではなく、後の資料に依存しているように思われる。とするなら、もう一歩前の資料があるはずだが、いずれにせよ、日本のアナキズム史上において画期的な発見である。

横浜ホテルの所在地については異説がある。2による と、現在の呼称に従へば山下町の区画に入ると考へられる」とするにとどまり、オイレンブルクの訳書では「居留地三十七番館。現在の山下町三六ー三九番地にあった」とされているが後者は明治一九年の刊行物を典拠にしたためであって、同年たしかにそこに横浜ホテルがあったことは事実であるが、Bの宿泊したホテルとは同名異物である。「菊富士ホテル」のような特殊な名称ならともかく、横浜ホテルのような平凡でありながらその場所にふさわしい名称は誰でも命名したくなったことであろう。バット・バー『夷狄襲来』によるとベーカー・スミス商会の広告にヨコハマ・ホテルがあり、『横浜案内』には写真つきで横浜ホテルの広告が出されているし、現在でも横浜ホテル、新横浜ホテルがあるが、これら一連のホテルはBの投宿したホテルとは全く関係ないと断定できよう。

Bが来港した当時（文久元年）の横浜港には現在の大桟橋のところに東波止場と西波止場があった。ややこしくなるが、後年、イギリス波止場と別称される東波止場、フランス波止場と別称される西波止場とは別であり、文久元年にはその当時の東波止場、西波止場ともに現在の大桟橋のところにあり、後にまとめて西波止場と称されるようになったと推定される。元治元年に築造された別の東波止場（フランス波止場）は山下公園の中央部にあり、当座は新波止場と称されていたらしいが、現在は跡形もない。Bは文久元年のときの東波止場（日本波止場という別称があったようである）もしくは西波止場から上陸し「開港早々の横浜」を「平気でブラブラとあるいて」（木村毅『東京』）横浜ホテルへ向ったことであろう。現在それを実地に後づけてみると——大桟橋の根元を起点にしそこを背にして歩きはじめるとすぐに第一の信号にぶつかる。そこを越えたところが一番館のあったところで、案内板が建てられており、それを右手にして直進し、細い通りを二本越えるとやや広い通りにぶつかるが、これがかつての本町通りであって、この通りをはさんだ向いの左方がかつての横浜ホテルのあった一画で今はいくつかのビルが建ち、そのなかに日赤神奈川支社がある。大桟橋から徒歩数分である。将来、日本のホテルとバーの発詳の地という案内標が建てられるかもしれないが、Bという「またとない珍絶無二の客人」（木村毅）をむかえたという記述がなされるであろうか。横浜の山下公園の近辺は文明開化を刻する史跡が随所にあるが、歴史的な重みからすれば横浜ホテルは屈指の史跡となる価値があるように思う。

2、4、5によると、Bと横浜を結ぶ基礎資料の一つがシーボルトの紀行記である。Bが横浜にいたのはおそくとも九月五日から一九日、シーボルト父子（以下、大S、小Sと略す）は九月五日にはすでに横浜におり、九月一八日七時（おそらく午前）に横浜を発っているから、著者の小SがBを目撃しても時間的に矛盾はない。しかし、小Sの『シーボルトの最終日本紀行』（小沢氏訳）には綿密な考証を加えねばならない。二、三コメントしておくが、まず前提として当該箇所を4に引照されている原文をもとに、誤植を訂正して訳出しておく。

しかし、このホテルには「乱暴ものども」だけでなく面白い旅行者たちもいた。……ハイネがそうであり、

シベリヤから脱走したのではあるが、そのさい察するに当局に大目に見られていたらしいロシヤのアジテーター、ミハイル・バクーニンがそうであった。彼はお金をたくさん持っており、彼と知りあいになるすべてのものに尊敬の念をいだかせる印象を与えていた。

第一に2によると、両SはBともハイネとも会ったはずはないという。ハイネやBが横浜にいた当時、両Sは江戸におり、二人が去った後に再び横浜ホテルへ宿泊し、そのときに「聞知した所を記した」のであろう、と推測する。板橋氏はその根拠を呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』に求めておられるが、私は大Sの日記（後出の黒田論文に拠る）などから、約一〇日間、両S、B、ハイネはともに横浜にいたと断定する。新暦と旧暦の日付のとり方はややこしいから、板橋氏か私か、どちらかが誤っていることは確実であるが、私は自分で換算したのではなく、黒田氏などの換算にもとづく。

第二に、昭和六年に公刊された邦訳書はあまり信用できないようである。たとえばBに関するところで、「此の場合当局が大目に見て居た」とあり、原文からすると「此の場合」とはBのシベリア脱出、「当局」とはシベリア官憲を指すのであるが、訳文からすれば、横浜のBを日本官憲が大目に見て居たととれる。2、5や木村毅『文明開格』はそう解釈しているが、4ではこの誤訳には触れることなく、原文を長文にわたって対照して誤訳を暗示している。

第三に、文久元年の横浜では、Bのシベリア脱出の消息はわからなかったはずであり、著者の小Sはこのとき一四才でBの名前すら知らなかったのではないであろうか。こうした疑問は本書が一九〇三年に刊行されたものであって、文久元年以降の多くの資料によって補完されていることを考えれば解決できる。黒田源次「シーボルトの文久元年の日記について」によれば、小Sの著書は大S自身の多くの記録を参照しているにちがいなく、参照していないと書けない証拠がたくさんある、という。おそらくBやハイネのことは大Sの日記か何かに書かれ、あるいは大Sが小Sに語ったりし、それをもとに小Sが資料を補足してできあがったのが、あの一節であると推定できる。大Sの日記はごく一部しか発表されていないように思うが、全文発表されたとき、私の推定の正誤がいくらかわかる。

第四に小Sはハイネをあまり好意的に記述していない。このことは『ペルリ提督日本遠征記』や洞富雄「シーボルトはロシアのスパイか」を小S↓大S↓ペルリ↓ハイネの系譜を頭におきながら読むと理解できる。まだ記しておきたいことはあるが省略する。最後に、小Sによると横浜でBは「お金を沢山もって」いたとあるが、小Sが故国へ帰ってから耳にした風評をもとにしたのか、大Sの日記にそう書いてあったのか、大SがBの財布のなかを見たのか、Bの玉突きの賭け金やバーの飲み代から判断したのか、大Sの日記を見るとわかると思われる。玉突きの賭け金については板橋倫行「横浜ホテルの玉突台」に考証があり、板橋氏はBが「旅の無聊をこの玉突台で慰めた」かもしれないと推測され、バーについては板橋倫行「バー事はじめ」があり、Bもこの酒場の常連であり、相当札びらを切ったことだろうとされ、「十三日間の船待ちの無聊はひとえに日本最初のバーによって慰められたに相違ない。」と断言されておられる。

函館か横浜かはわからないが、ヘクト『ロシヤの過激派のアメリカ管見』によれば、Bは日本で「おそらくは政治的に進歩的なアメリカの商人」と接触する。函館か横浜か、それともそれ以外のところか。邦訳では落ちているが、函館が「最初の」港であった、とカーは言う。ギヨームによるとBは函館から違浜へ向うのに、7によるとBは函館から神奈川へ向うことになる。ネットラウの小さなB伝によるとBは日本の「いくつかの」（英訳では「セブラル」）港を経由するとある。ネットラウのあの有名な肉筆のB伝によると、九月一七日にBはハイネとともにアメリカ船のキャリントン号でサンフランシスコへ向って神奈川から出帆するのであって、函館、横浜、神奈川で三つとなり、「セブラル」と言えなくはない。かりに函館から横浜へ向ったとしても、そしてかりに横浜からサンフランシスコへ出港したとしても、Bが横浜へ上陸し運上所へ姿を見せた直後に、小舟で神奈川へ渡ったささやかな可能性があるのであって、Bが神奈川の地を踏んだ公算は大である。とするなら、函館と横浜、とりわけ横浜ホテル周辺にこだわり続けた私たちのB追及は未知の資料を求めながら再出発した方がよさそうであるし、おそらくその再踏破では思わず息をのむ場景や資料に一再ならず遭遇するはずである。横道に入ってしまったが、日本の某所で会ったアメリカ商人は誰であったろうか。これと関連してここへ「コロコル」配布の一件についても記しておきたいし、Bの離日についての事実に関するいくつかの択一的な疑問、出発日は九月七日か一七日か、出発港は横浜か神奈川か、船名はピーターソン、ウエリントンそれともキャリントンか、サンフランシスコ着は一〇月一〇日、一五日それとも一六日か、これらについて典拠とともに解答を与えておきたいのだが、それらは他日の再踏破に譲ることにしよう。

そして、Bのシベリヤ脱出というこの壮大なドラマの大団円を観察することにしよう。

もし私たちが百余年のタイムトンネルをくぐりぬけてBを乗せたアメリカ船に乗船することができたなら、国際色ゆたかなその船上で見かけるのはBだけではない。カーによってその日記が発見され、その事実に対して碩学ネットラウですら賞讃を惜しまなかったイギリスの牧師コーがいる。『嘉永明治年間録』や『随聞積草』にその名をとどめ、オイレンブルクの一行と天津で別れて、アメリカへ向うドイツの画家ハイネがいる。なお私たちは流暢な英語をあやつる日本人らしい一人の男を目撃するであろう。横浜到着直後のBと会ったかもしれない浜田彦蔵（ジョセフ・ヒコ、アメリゴ・彦蔵）もキャリントン号の乗客であった。古来礼節を尊ぶ日本が浜田をしてBをアメリカまで見送らせたのであろうか。それとも、その連合主義ゆえに後にBのめがねにかなうアメリカがBを迎えるべく使者として浜田をその前年に派遣していたのであろうか。函館をふりだしとするBの一ヶ月に足らないBの日本滞在の記録は今のところとぼしいとはいえ、その記録の一つ一つに私たちは運命の女神のあざやかな采配を感じざるをえない。だがそれにしても彼女は邪気のないいたずらをするものである。けだし、彼女が日本からアメリカまでBと同行させたのは三人の国家のボス（ピアス、ブキャナン、リンカーン）と握手する浜田であり、神の下僕コーであったのだ。

Bをサンフランシスコへ無事おくり届ける大任を果たした、そのころでは大きな船に属する八〇〇トンのアメリカの蒸気船キャリントン号は翌年の二月二三日、九月一九日にもサンフランシスコから横浜へ着港するが、そのときには珍客は乗船しなかったようである。

3

約一ヵ月の滞在で日本がBの頭に刻み込んだものは無に等しいようである。これがもしシベリヤと日本にいる間に東洋学を修め、ロンドンでマルクスにアジア的生産様式を教示したというなら、劇的なのであるが、この可能性もまた無に等しく、キリストが青森県の戸来（「へらい」と読む。「ヘブライ」のなまったもの）で死んだという一節の方が、時間的にはるかに真実性を帯びる。けだし、キリストは百余才で戸来で没したのであるが、アジア的生産様式はBがシベリアにいる間にマルクスの著書に発表されているのであるから。木村毅『文明開化』が推定しているように、マルクスがその理論を深化させる契機をBとの最後の会見で得たかもしれないが、もし

そうであるならクランストンはマルクスとBの架空の対話を角度を変えて構成していたであろう。おそらく、3、5が指適するように、Bはのちのちまで日本を思いうかべて親しみを失なわなかった、という程度であろう。

これからのために資料について記しておく。機会を得て見たい資料のなかで、私は小Sの『日本最終紀行』のソースに最も関心がある。先に述べたように、この記述は大Sの日記その他をもとにしていると思われるが、大Sは同じ植物学者でもツェンベリーとちがって多方面に関心をよせていたらしく、未見だが岩崎克己「シーボルトの成吉思汗即源義経説とその後世への影響」という論文があることから推測すると、大Sは源義経が大陸へ渡ってジンギスカンになったという俗説（この俗説の大成者こそ恐山の巫女を通じて戸来で没したキリストの声を聞いた小谷部金一郎博士である）を海外へ輸出した男だから、横浜へ姿を現わしたBをどのように表現していたであろうか。ことによると、大Sの弟子のなかにB評を聞いたものがおり、書き留めた記録があるかもしれない。

Bの来日を立証する伝聞ではない原資料は、Bの書簡をのぞいてもかなりの数に達するから、それらの諸点をつなぐと、B来遊の実態がもっと明らかとなるであろう。

意外に歴然としているのは函館関係であり、ロシヤ領事の関係諸資料のなかにまだあると思うが、岡田健蔵氏が新村氏の論文を目にしていたなら、きっと考証をされたと思うから、さしあたっては岡田氏の著述目録をあさった方がてっとり早い。

横浜と神奈川関係では、公開資料からは今後も期待できないが、羽仁五郎氏、大仏次郎氏、長谷川伸氏、石野瑛氏などの蔵書、「馬車道十番館」や「三渓園」にある資料等々のなかに、何かがあるように思われるし、東京大学、天理大学の図書館も有益な資料を保存しているはずである。最近の新聞によると、横浜の外人墓地の埋葬者第一号の葬儀の様子をくわしく書いた『扇浦紀聞　上之巻』が名古屋で発見されたのは昨年夏（今は神戸の歴史家が所蔵）、ベルリの一書簡が東京の古書展に出品されたのは数年前（今は横須賀博物館所蔵）今年七月に初めて一般公開）であるから、今後とも貴重な資料の発掘は大いにありうることである。横浜浮世絵の数は冒大であるから、Bが玉突きを楽しんでいたり、ハイネとシベリア脱出の祝杯をあげていたりするものがあるかもしれない。ことによると、大Sのもちだした浮世絵のなかにそれがあるかもしれないが　今年は大Sの江戸参府五五〇年ということで「里帰り」したもののなかにはそれらしきものはない。

これら以外にも触れているものがかなりあるが、必要なものは後に利用する。小泉信三氏（昭和二二年）、勝田吉太郎氏（昭和四二年）に代表されるバクーニン年譜もいくつか編まれているが、目新しい事実をつけ加えるものではない。バクーニンだけをあつかったものではない年譜のなかでバクーニン来日を記した年譜は平岡雅英『維進前後の日本とロシア』についているものだけであろうが、昭和九年に刊行された本書の増補本『日露交渉史話』（昭和一九年）になると、本文からも年譜からもバクーニンが削除されており、時代を感じさせる。

以下、前記の五論文およびカーとピールモヴァのバクーニン伝に述べられていない事実を中心にして、極力複数の典拠を明示しながら記述を進めるが、六氏の考証をも含めたバクーニン来日の詳細は、今後多くの資料で補完し、バクーニン生誕二〇〇年記念のときに譲らざるをえない。紙面がごく限られているので、バクーニンをB六氏の論文は冒頭の数字で示し、『　』は単行書を、「　」は論文（収録書、雑誌名は省略）を示す。日本語訳のものは訳者を割愛する。

六氏の論文のうち最も周到なのは5で、博覧強記をもって知られる新村、木村の両氏でさえ寓目しえなかった日本側資料に到達していることは特筆せねばならないのであるが、バクーニンが横浜ホテルへ投宿した事実を最初に指適したのは板橋論文であったようだ。1と4と5が密接なつながりがあり、2から5はすべて1を参考にしており、5には久保譲氏の海外での調査をもとりいれている。

バクーニンの来日は今となってはあまりにも有名な事実であり、どういうわけか萩原晋太郎『アナキスト小辞典』にはないが、新村出氏の編集した『広辞苑』には、「シベリア流刑中、日本・アメリカを経由してロンドンに亡命」とあるほどに広く人口に噂炙しているにもかかわらず、その足跡調査があまりなされていないのは残念である。六氏によってようやくその調査のいとぐちが与えられたように思うが、1と2の間は二〇年以上も離れているから、別の筆者によって発表されたものがあるかもしれない。新村、木村、逸見、久保、金子の各氏については紹介するまでもなく著名な方々であるが、板橋倫行は後出の論文の筆者紹介によると「朝日新聞古典編集部員」となっており、『万葉集』『今鏡』などの研究者でもあり、「今はその存在さえ忘却の霧のうちに埋れてしまっていた「横浜ホテル」を私はかく辛じて白光の下に引出した。」と自認されるが、同氏の研究は不朽の意義をもつ。

外国所在のものではBの手紙がまず第一である。刊行されたものではボロンスキー編の資料集とドラゴマノフ編の書簡集などがあるが、いずれも手紙の全体のなかのごく一部であろう。カーの論文は前者をしきりに引用している。後者の独訳と仏訳はいくらか日本に流れこんでいるはずであり、戦前ご所蔵であったある大学教授の話では青色の表紙であったとご記憶されていたが、新村氏は大英博物館でお読みになり、リプリントではない原本は現在日本には少くとも一冊（エルツバッハー文庫）はある。ステクロフ編の著作と書簡集はリプリントされたが、手紙は一八六一年三月一三日で終っており役立たない。それ以外の公刊資料については省略する。未刊の資料のうちコーの日記の原文はどこにあるかわからないが、その抜粋はカーがネットラウに進呈し、これは社会史国際研究所に今でもあるだろう。横浜の外人居留地の一番館はジャーディン・マセソンであり、現在でも日本支社は東京にあるが、前述した「豚屋火事」や関東大震災で貴重な記録を焼失したという。（『日本に於ける百年、英一番館』による）。数年前に、社史刊行の予定があったと言われるが、どうなっているであろうか。ふつう「英一番館」の異名で知られていたようであるが、現在、かつての英一番館跡の近くに「英一番館」があるが、といっても、これは喫茶店の名前である。ハイネの紀行記はいくつかあるが、邦訳があり、吉野作造博士が自著にごく一部を引用されているのはベルリといっしょに来航したときのものであって、Bと出会ったときの紀行記は新村、板橋両氏がお読みになっているが、私は未見である。Bの伝記はすべて二次資料であり割愛する。

こうしてみるとまだ多くの資料がありそうである。35などから推定すると、B来日を最初に伝えたのは酒井雄三郎であるようだが、その頃に調査をしていたなら、当時を知る人々が生存していたはずであるから、今となっては知る術もない事実を明らかにできたように思う。同様に、生誕二〇〇年のときに、せめて没後一〇〇年のときにもっと調べておいたなら、という後悔が生じるかもしれない。いずれにせよ、二〇一四年まであと三八年しかない。

その後に入手した資料その他から訂正と補足をしておく。

(1)　本文に記した岩崎論文を読むことができたが、むろんBについて記すところはない。文久頃の江戸では外国人殊に大Sといえば何事も信用する世上の有様であっ

た、という趣旨の引用があり、それだけにBについて何かを口にすれば誰かが書き留めたという推測は妥当と思う。岩崎克己氏は麻生義輝氏の知己であったらしい。

(2) 横浜ホテルでBと同宿した大Sはその直後にハリスと会い、三ヶ月後に伊藤　介と会う。九月二〇日にハリスを訪ねたときの記録はなく、坂田精一氏によると、その頃のハリスの日記は発見されなかったので、その会見の模様は未詳であるが、伊藤　介との会見の様子は記録に残っている。呉氏の大S伝では二人は船の中で再会するが、本当のところ、場所は横浜ホテルであった。この会見を記した田中芳男『横浜雑誌』（稿本）は現在名古屋にあると思うが、吉川芳秋「伊藤　介翁」によると、大Sの宿泊した「異人之旅館」には「玉衡ノ台二ツ有」酒場についても記すところがあるが、このとき、ワーグマンが二人を石筆画で描いたという。ワーグマンこそ、『ジャパン・パンチ』の筆者であり、本文中に記した一八六六年の同誌の玉突台の図はこの記述から横浜ホテルのものと推定され、かくしてその図に附した「われらの友人Bが玉突で遊ぶ姿」という説明のBとはバクーニンのことではないか、と推定がつづくのである。この推定の当否の判定は保留しておくが、ワーグマンはB以前にすでに横浜ホテルの旅人たちの一人であったことは、「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」一八六一年八月十日号から知られる。洋画、漫画、あるいはポンチ絵と結びつけられるワーグマンの他の一面については羽仁五郎『日本人民の歴史』などに記されているように、彼は社会問題にかなり鋭い観察眼をもっていたから、肖像を描く間に、大SからBのことを教えられ、それを記憶していたかもしれない。とりわけ、大SはBと会ったのと同じ場所でワーグマンと会ったのであり、しかも外国人どうしという気やすさも加わっていたであろうから、大Sがざっくばらんにし評を語ったことは十分に推測できる。

(3) ナショナル・アーカイヴ所蔵の神奈川駐在米領事の資料のうち、一八六一、六二年分をマイクロ・フィルムで見ることができたが、Bについては全く記すところがない。Bのロシア出国、日本入出国、アメリカ入国はすべて、ややこしい手続の全くいらない古き良きおおらかな時代だからこそ可能だったのであろう。後年、シベリアから長崎へやって来たあるアナキストの場合はどうであったのだろうか。文久時代の日本のトビラはBのために開放されたのに、『通信全覧』『日本ホテル史』などの基礎資料をもつ諸文庫のトビラは「ふつうの市民」や「あたりまえの労働者」のために開放されていない。

(4) 横浜ホテルの名称はオイレンブルクやヲーグマンによると「ヨクハマ・ホテル」であり、フーフナーゲル・ホテルの異称を考えるとき、正式ないし公式の名称はなくどれでもいいのではないかと思うが、本文では、板橋氏にならって「横浜ホテル」で統一した。

(5) グザノフ「橘耕斎とゴシケビチ」によるとゴシケビチは一八六五年、つまりBと会った後およそ四年間函館にいたことになる。日本の役人は函館のロシア領事館をしばしば訪問し、客人好きのゴシケビチら領事から歓待されたというから、彼とBが会ったとき、日本人が二人を目撃し記録に残した可能性はある。日本語文書でゴシケビチの名前がでてくるものは、たとえば『続通信全覧』『夷匪入港録』などで、彼と日本人の関係を論じたものとして未見だが、石黒敬七氏などがある。Bと会った以後の滞日日数は大Sよりも圧倒的にゴシケビチの方が長いから、函館のBを記した日本側資料は横浜のBの記録よりも発見される可能性は大である。（ゴシケビチの日本語表記は本文と食いちがっているが、グザノフにあわせた）。

(6) 逸見氏の論文が以下に収録されて最近公刊された。
逸見吉三『墓標なきアナキスト像』三一書房　昭和五一年。

(7) 石井研堂『明治事物起源』は書名不詳本に記されている異人旅籠屋をクラブホテル（文久三年建設）と推定されているが、他の資料からして、これは横浜ホテルの説明である。『横浜市史稿』（風俗編）のホテルに関する記述（五六三、六八一ページ）は矛盾するが、石井氏をひきうつしたせいである。

(8) 本書の冒頭に掲載した貞秀の「細見」は文久二年以降のものであることは描写されている他の建物から断定される。井上和雄「玉蘭斎貞秀の晩年」によると、貞秀のものは「地理的に詳細を極めたる一覧図」とされているから、B来日時代の横浜の外人居留地のふん囲気は十分にうかがえるであろう。

4 〝バクーニン全集について〟望月百合子さんに聞く

もう半世紀も前のことですし、資料はほとんどないので何もわからないと思います。一九四八年満州より戻り、後で神田へ行って買いそろえていますが、まだほとんどそろっていません。

全集は予定では独仏西露語を照合してやるようになっていますが私は仏語だけ、結局翻訳するまでには至りませんでした。私が訳す分は第七巻の「一フランス人に与ふる書」で年表も私が作ることになっていました。年表の方は石川三四郎にぼつぼつやっておいた方がよい、といわれていたので少しやっていました。

スペイン語版も照合するようになっていたようですがスペイン語をできる人はいなかったと思います。露語からは水沼熊さんがおやりになる予定だったと思います。主に独仏版を中心とし、英訳版も利用するというようだった。

八太舟三は全集では全然訳す予定がなかった（彼はバクーニンを訳したことがある）。八太さんは英語だけしかできず、新居さんとの仲もあまりよくなかった。社会理想研究会の実体はわからない。このグループの人々が中心のようだけれど石川三四郎の家（望月さん達はここに住んでいた）には来なかったと思う。来ていれば記憶しているはずだから。広告に載っている名前はほとんどペンネームではなくて本名だと思います。当時からそう話ししていたから。しかしほとんどの人を知りません。川合仁は当時三十位で『潮流』とか『単騎』に関係していたのでそれに集った人ではないかと思う。

自由書房が最初にバクーニンの全集を計画したらしいとのことですが、自由書房というのは知りません。延島英一も個人で計画があったようです。彼は非常に頭がよかったが後に東洋経済（石橋勘山）へお入りになりました。

全集の中心人物は外国には「ミヤタ」が紹介されていたようだが、「ミヤタ」という人は知りません。学生グループの人はよく知らないのです。クロポトキンの著作

集にも関係したとのことですがわかりません。

延島英一は独仏語ができました。能智修弥は古川時雄の同窓（大学が）で、時々話しをしますが、今は日中友交関係の仕事をし、現在はアナキズムには関心がないようです。彼にまえもって聞いてみましたがほとんど記憶がないようです。彼は仏語はできないと思いますが、英語はよくできた。

発行部数は千部位ではないかと思う。発行したのは石川三四郎の所へ送ってきました。これは見ています。当時は皆がボルの方へ行った時代でした。だからなにかをやろうということで始まり、出はじめるとうれしかった。

私の心境としては当時、バクーニンの思想はピッタリだった。しかし今はソ連、中国の革命を見、破壊の思想だけではダメではないかと考えている。若い頃はそれでも総破壊の思想は魅力だった。今でも妥協しない思想は重要だと思う。

第六巻の「新たに発見されたバクーニンの手紙」は石浜知行が『社会思想　四巻二号』に発表したものと訳文が同じで新居格訳になっているとのことですが、その間の事情はわかりません。新居格は独語はできないと思う。

全集は石川三四郎・新居格監修となっているがこれは頼まれてやったのだと思います。相談にはあずかっていましたがあまり関係なく、ほとんど学生の間で進められた。石川三四郎は独語はできません。少しはできたが読みこなせるというわけにはいかなかった。

榎本桃太郎（学生グループの一人）は毎日新聞の記者となってトルコへ行った。トルコで毎日をやめたのだけれど日本へは帰らず戦後、向うで死んだ。日本で友人知人が集まって追悼会のようなものを戦後開きました。

新人会の人々は全集の翻訳には全然はいっていない。個人的な接触はあったろうが手伝うことはなかった。彼等の所へ時々石川三四郎は呼ばれて話をしにいったことはある。

刊行中絶はお金が原因。第四回目の配本はどれであったかわからない。いつのまにか中止になったという感じで、やめるという話が伝わったというのではなかった。四回配本については何巻なのか、どのようなのか何もきかなかった。

近代評論社へ行ったことはない。

川合仁が生きていたらもっとわかったのだろうけれど私にはこれ位のことしかわからない。

†

以上の文章は日本語版バクーニン全集について、予定されていた訳者の一人、望月百合子さんの話しを論文の形になおしたものである。八月一〇日に望月さんのお宅で当方から全集に関する資料を提示して質問し、ご解答をいただき、それを山本が右のようにまとめた。『回想・川合仁』に望月さんが発表された「川合仁の思想」もあわせて参照してほしい。文中敬称を省略したことをはじめ一切の文責は山本にある。